

アルチュセールのマルクス主義論

—その一断面—

重田 晃 一

まえがき

わが国でもここ数年、構造主義理論にたいする関心の高まりを反映して、アルチュセールの構造主義的マルクス主義が注目されつつある。いうまでもなく、アルチュセール自身は「構造主義的マルクス主義の可能性」はありえないといひ、構造主義のイデオロギーはブルジョワ的世界観の「人文科学に固有のヴァリアント」にほかならぬと規定することで、構造主義イデオロギーこそ当面のイデオロギー闘争の主目標の一つだといっている。⁽¹⁾だが、その構造主義を科学の方法と解するなら、ピアジェもいうように、アルチュセールのマルクス主義解釈から出てくる積極的主張は、「マルクスの弁証法をヘーゲルのそれから切り離し、前者に構造主義の形式をあたえ」、それによって「マルクス主義の認識論(epistemologie)をつくりあげ」ようと試みている点で、⁽²⁾かれ自身の否定的主張にもかかわらず現代構造主義の思潮に棹さしていることは否み難い。では、ピアジェのいう「マルクスの弁証法に現代の構造主義の形式をあたえる」ことが、マルクス主義の今後の発展にいかなる形で寄与するのか？

構造主義の思想と方法が今日の注目される思潮の一つであるだけに、かれのマルクス主義論は検討に値する問題と云つてよからう。

しかし、われわれがかれのマルクス主義論に注目する理由はそれだけではない。マルクス主義思想の総体は、これを分析的に把えるなら、主意説的要素と決定論的要素、あるいは主体性の契機の重視と科学的客観性の側面の強調という相互対立的な二極に分離することができ、その体系上の独自性はいわばこの二極の弁証法的統一にあると云つてよい。マルクス主義の「正統的」解釈はこの弁証法的統一の立場を自負したのであったが、その問題性はスターリン批判を契機にはしくも暴露された。こうして、スターリン批判以後のマルクス主義研究が、旧来の正統的解釈をそのまま継承するならいざ知らず、多少ともすでに指摘した二極のいずれかに傾斜するに至つたのは止むをえない状況と云つてよからう。マルクス主義研究のこういつた二極分解的傾向は今日ではもはや否定し難い国際的潮流と云つてよく、その今日の特徴は、一方の側が初期マルクスの著作（ことに『経済学哲学手稿』）を重視し、それによって後期マルクスの著作を読み直すことでマルクス主義のヒューマンイズムの側面を強調しようとするのにたいして、他の側はマルクス主義におけるイデオロギーと科学との分離を主張し、あるいは現代科学の成果の批判的摂取を説くことで、科学主義的色彩を色濃くしつつある点にある。いうまでもなく、アルチュセールの立場は後者の流れに属し、その特色はマルクス主義の科学性と客観性の保証を構造主義的方法の理論的厳密性に求めようとするところにあるのだが、その徹底的に考え抜かれた旧来のマルクス主義解釈にたいする反省は、論理の緻密さとあいまって、この系統のマルクス主義解釈にたいする賛否を越えて教えられる点が多い。

以下、本稿では以上の問題意識に導かれつつアルチュセールのマルクス主義論をとりあげるのだが、かれ自身

のマルクス主義への寄与としては、マルクス主義とヘーゲル弁証法との関係の批判的再検討と結びついて提起された「重層的決定の理論」などが特に著名である。だが少なくとも私には、これらの積極的主張は、旧来のマルクス主義解釈にたいする反省やそれと結びついたかれ独自のマルクス主義論と切り離してはその真意を捕捉し難いように思われる。こういったわけで、以下ではこの点についてのかれの所説の概要をひとまず系統的に整理する。この所説にもとづくかれ自身の積極的主張とかれのマルクス主義論総体のはらむ問題性についてはいづれ別稿を用意したい。

(1) この点については、西川長夫「ルイ・アルチュセールと哲学の復権」、アルチュセール著、西川長夫訳『レーニンと哲学』一九七〇年、一四九ページを参照。

(2) ジャン・ピアジェ著、滝沢・佐々木共訳『構造主義』一九七〇年、一二八ページ。

(3) フランスの動向については、河野健二「現代マルクス主義の二つの立場—ヒューマニズムと構造主義」、『思想』一九六八年五月号（後に河野・田村共訳『甦るマルクス』第一分冊に訳者解説にかえて再録）が、社会主義圏の動向については、花崎泉平『マルクスにおける科学と哲学』一九六九年、「序論『マルクスの哲学』研究の現段階」および第二章の(3)が有益である。その他に芝田進午編著『現代革命とマルクス主義哲学』上下二巻、一九七〇—七一年の該当論文を参照。なお本稿の構想をたてるにあたっては、前掲河野教授の論文より多くの点を教えられた。

一

アルチュセールのマルクス主義論の特色の一つは、一方でイデオロギーと科学との明確な分離を主張するとともに、それを基礎にマルクス主義の思想体系をひとまず、科学の体系（史的唯物論）として規定することにある。では、かれにとってイデオロギーとは何か、科学とはいかなるものなのか？

かれはイデオロギー（宗教・倫理、哲学など）を規定して、「ある一定の社会内において歴史上の存在と役割を与えられた徴表〔représentation〕（それは場合によって、イマジジュ、神話、観念、あるいは概念）の一つの体系（その固有の論理と厳密性を保持している）」だという。このように徴表の体系という点で、それは一つの「種別的形成物」をなし、一方で「基礎としての経済活動」や「政治組織」と区別されるとともに、他方ではこれらの諸領域と並んで、これらの諸領域を動かしている「種別的複合性のタイプによって構成される統一性」をそなえた社会総体の「有機的な一部分」をなしている⁽¹⁾。

他方、一般に人間の社会的活動は「イデオロギーの中で、イデオロギーを通して、イデオロギーによって展開される」という点に着目するなら、イデオロギーとは「人間とかれの『世界』との関係の表現」だといってもよい。ただイデオロギーの特色はこの関係の表現の仕方、方法にかかわるのであって、アルチュセールによれば、イデオロギーでは、人間の現実の存在条件にたいする関係において、「現実上の関係が不可避的に想像上の関係に包まれ」ていて、この関係の表現が「現実上の関係と想像上の関係との（重層的に決定された）統一」をなしていることにある。かれが科学とイデオロギーとの峻別を主張する理論上の根拠はイデオロギーのこの「重層的決定」⁽²⁾（surdétermination）にかかわるのであって、そこでは「想像的なものによる現実的なもの、そして現実的なものによる想像的なものの重層的な決定」が作用している結果、人間の現実の存在条件にたいする真実の関係は顛倒され、あるいは変換された形態で意識の領域にのぼされることになる。しかもこの種の顛倒され、変換された意識の特徴は、それが「なによりもまず構造として大多数の人々に認められ」、いわば無意識の意識として、「かれらの『意識』をとおらない」点にあるのだから、イデオロギーのレヴェルにとどまるかぎり、イデオロギ

ーには自己を通して表現されている現実上の真の関係への通路が閉ざされているといわなければならない。⁽⁵⁾ アルチュセールがイデオロギー的概念について(例えばヒューマンイズムの概念)、それは「ある特殊な(イデオロギー上の)様式によって、存在しているものを指示しているが、それらの本質を与えない」といい、科学的な概念と異なつて「現実を認識する方法を与えない」と述べるとき、それは以上のようなイデオロギー把握を前提していたのである。

では、科学はどの点でイデオロギーとちがうのか? アルチュセールはイデオロギーとしての哲学と対比しながら、例えば現実の科学的認識についてつぎのようにいつている。「哲学は宗教や道徳とまったく同様に、イデオロギーにすぎない。哲学は歴史をもたない。哲学の中で起こっているように思われることはすべて実際は哲学の外で、唯一の現実の歴史である人間の物質的な生活の歴史の中で起こっているのだ。科学とは、したがって、現実を覆い隠すさまざまなイデオロギーを……破壊することによって現実の覆いをはがすという行為を通じて認識された、現実そのものである。⁽⁶⁾」

アルチュセールによれば、このように科学は一定の思想形態(例えば「哲学的意識」)をイデオロギーとして批判し、それとの「断絶」の上にはじめて樹立されるのだが、その場合の科学の一般的な認識構造をかれはさらにつぎのように説明している。

かれはまず科学的な認識行為を実践の一形態とみなし、この理論的実践の働きかけの素材は、「経験論や感覚論におけるイデオロギー的幻想」がそう考えるように、直接に「存在するもの」ではなくて、「現存の諸概念」(concepts existants, Vorstellungen)——それは科学の成立期にはイデオロギーの性質をおびている——だといひ、

その抽象性と普遍性に着目して、これを「第一の一般性」と名づける。かれによれば科学における理論的実践とは自己の働きかけの対象をなすこの素材としての「第一の一般性」を「特殊化された諸概念 \checkmark 」、つまり「認識というもう一つ別の \wedge 具体的な \vee 一般性」(多くの諸規定の総括、「多様なものの統一」)としての「具体的なもの」⁽⁷⁾——かれはこれを「第三の一般性」と呼ぶ——につくり変える作業である。ところで、一般に実践の過程では労働そのものと労働の素材との間には「生産手段」が介在するはずである。では、理論的実践の過程ではなにが「生産手段」として機能するのか？「科学のすべての問題が不可避的にその中で提起されざるをえない場を定める」ところの「一定の時期」における「科学の \wedge 理論 \vee 」^(補註)がこれであって、アルチュセールは、この「理論」が「一群の諸概念から構成されている」点に結びつけて、これを「第二の一般性」と名づけている。こうして、いまやかれはつぎのようにいう。科学的実践とは、「第一の一般性」(イデオロギー的概念)にたいする「第二の一般性」(「理論」としての科学)の仕事によって「第三の一般性」(認識)をつくりだすことだ、と。換言すれば、人は理論的実践の過程の中で「第二の一般性」の活動を媒介に「これまでのイデオロギー的な実践によって練りあげられたイデオロギー的な \wedge 事実 \vee 」を批判し、これを「科学に固有の事実」につくり変え、練りあげるとともに、他方、この「事実」の理解を通じて「所与のもの」(直接に「存在するもの」)の科学的認識に達するのである。⁽⁸⁾

さて、以上瞥見したように、アルチュセールはイデオロギーと科学とをはっきりと区別する。むしろ他面で、イデオロギー的な現実把握から現実の科学的認識へという図式にも示されるように、かれはこの二つのものが一定の関連におかれていることを否定するわけではない。⁽⁹⁾だがその場合にも、かれは両者の連続性の面よりは、

「不連続性」、「断絶」の面を特に強調する。なぜなら、すでにみたように、科学的認識が成り立つためには、「イデオロギー的な事実 \vee 」は「科学に固有の事実」につくり変えられねばならず、この変換はイデオロギー的な概念および概念装置を科学的な概念および概念装置におきかえることではじめて成就されるのであってみれば、イデオロギーから科学への移行にさいしては、そこに「特殊な変化作用」が働くとしなければならぬからである。アルチュセールはガストン・パンシュラールに倣って、この「変化作用」のもたらすイデオロギーと科学との間の関係の断絶面を「認識論上の切断」と名づけ、⁽¹⁰⁾ こうした「切断」とそれにもとづく新しい科学の成立という人間の認識史上の革新について、これを新大陸の発見と開拓になぞらえながら、その典型的事例をターレスによる「数学の『大陸』の開拓」とガリレオによる「物質的自然の『大陸』の開拓」の中にひとまず求めている。これによれば、マルクスによる史的唯物論の確立はこれらの偉業に比肩する科学史上の一大金字塔をなすのであって、それというのも、「マルクス以前にはただ二つの大陸（数学と物質的自然の大陸―重田）のみが絶えざる認識論的切断によって科学にたいして開かれていた」にすぎなかったのに、マルクスの史的唯物論は「歴史の『大陸』」にはじめて科学的開拓の鍬を打ち込んだからである。⁽¹¹⁾

だが、マルクスによる「歴史の大陸」開拓の革新的意義は、この開拓によってこれまでイデオロギーの霧に包まれていた歴史の領域が科学的認識の体系内に組込まれたことだけにもとづくのではない。すでに指摘しておいたように、イデオロギーのレヴェルにとどまるかぎり、イデオロギーにはそれを通して表出されている真の現実上の関係への通路が閉ざされていたのであったが、史的唯物論の成立は、このイデオロギー成立の必然性と機構を解き明かすための手懸りを与えたことによって、この閉ざされた通路を開き、イデオロギー的顛倒や変換を通じ

て表現されている現実上の関係の眞の内容を析出することを可能ならしめる。アルチュセールの言葉を借れば、イデオロギー上の概念は「存在する現実の総体を指示する」にとどまっていたのにならして、史的唯物論は「その現実を認識する方法」を与えたのだといつてもよい。⁽¹²⁾ いまや、人はこの方法に従ってイデオロギーの形式の下に覆い隠されていた内容に科学的形式を与えることが可能となり、またそうすることでイデオロギーの批判と誘導にはじめて科学的方向づけを与えることができる。したがって、イデオロギーの眞の内容と志向を確定し、それを合理的組織的に批判し、誘導しようと思むなら、史的唯物論に依拠したイデオロギーの分析と批評とが不可欠であつて、アルチュセールが史的唯物論の成立を科学史上の一大革新として規定するヨリ深い根拠（＝実践上の根拠）もこの点にある。⁽¹³⁾ しかもかれの説くところでは、「イデオロギー（大衆の徴表体系としての）」というものは、人間の形成と変化とが人間の存在条件の要求に呼応する形でおこなわれるためには、どんな社会でも欠くわけにいかない⁽¹⁴⁾のであつて、共産主義社会といえども「イデオロギーを必要としなくなるだろうとは想像できない⁽¹⁵⁾」とされるのであつてみれば、ますますそうである。

ところで、イデオロギーと科学との峻別、イデオロギーと科学との関係において史的唯物論の占める特権的地位に関する以上のアルチュセールの解釈は、つぎのような問題を提起するはずである。かれによれば、史的唯物論はすぐれて科学の体系であつた。とすれば、すでに指摘したイデオロギー的な前科学的現実把握と科学的認識との間に介在する「認識論上の切斷」という人間の認識史にかかわる一般的図式は歴史科学としての史的唯物論の成立過程にも適用されるはずであつて、そこから、この歴史科学の成立過程である「認識論上の切斷」がいつ、どこで、いかにして生じたかが当然問われなければならないまい。あるいはこれをつぎのように言いかえてもよい。

イデオロギーと科学との関係についてのマルクスの結論を史的唯物論に依拠しつつマルクス自身の思想形成の歩みに適用すること。⁽¹⁶⁾

しかもアルチュセールの場合、以上の規角にもとづくマルクスの思想形成史の研究は、いたずらな歴史的回顧趣味にもとづくのでないことに注意しなければならない。というのはこうである。元来、かれにとっては、哲学はイデオロギーの領域に属していた。してみればあの「認識論上の切断」によるイデオロギー的哲学の克服とそれにかわる歴史科学としての史的唯物論の成立は必然的に哲学それ自体を問題化するはずであって、哲学のこの問題化はマルクス主義哲学の存立とその根拠の問題をあらためて提起せずにはおかない。しかもアルチュセールの立場からいって、この問題をマルクスの著作に即して解こうとするなら、科学者マルクスの著作だけが典拠となりうるのであり、⁽¹⁷⁾こうしてイデオログ・マルクスの著作と科学者マルクスの著作の腑分けこそ先決問題だということになる。アルチュセールにとっては、マルクス主義成立史の研究はマルクス主義哲学再生のための不可欠の環なのである。

- (1) Cf. L. Althusser, *For Marx*, London 1969. 河野・田村共訳『甦るマルクス』一九六八年、第二分冊、一六一ページ。
- (2) 「重層的決定」については、より詳しくは論文「矛盾と重層決定」、「唯物弁証法について」のIV、Vを参照されたい。
- (3) Cf. *ibid.*, pp. 233~234. 邦訳、第二分冊、一六三—一六五ページ。
- (4) Cf. *ibid.*, p. 223. 邦訳、第二分冊、一四八—一四九ページ。
なお、以上のアルチュセールによるイデオロギーの規定については、フランスでかれと同じ立場に立つ人々の間でも異論があり、その点については、半田秀男「現代フランスのマルクス主義哲学」(芝田進午編著『現代革命とマルクス主義哲学』下巻所収)がその一端を紹介している。
- (5) アルチュセール『レーニンと哲学』邦訳、三二—三三ページ。

厳密にいうと、この文章は『ドイツ・イデオロギー』におけるイデオロギーと科学の関係に関する解釈として述べられたものだが、それをそのまま著者の考えを示すものと受取って差支えないように思われる。

- (6) 発展期の科学においては、これらのイデオロギー的概念は、半ばイデオロギー的で半ば科学的な概念に、あるいは科学的に練りあげられてはいるが、前段階の科学に属する概念におきかえられる (*For Marx*, p. 184, 邦訳、第二分冊、八六ページ)。
- (7) K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Dietz Verlag, Berlin 1951, S. 257. 邦訳、国民文庫版二九五ページ。ただし、アルチュセールがマルクスの「経済学の方法」における抽象的なものから具体的なものへの上向法における「抽象的なもの」とかれの「第一の一般性」とを等置するのは問題であろう。総じて、「経済学の方法」に関するかれの解釈は多分に検討の余地を残しているように思われる。
- (8) Cf. L. Althusser, *For Marx*, London 1969, pp. 183~185. 邦訳、第二分冊、八五―八七ページ。
- (9) 念のためにいっておけば、アルチュセールはすべてのイデオロギーが「認識論上の切断」によって科学に転化すると主張するわけではない。理論的イデオロギーのみがそうなのであって、その他のイデオロギーは「政治的切断」(例えば革命)によって形態転化を遂げるか、場合によっては消滅する (Cf. *For Marx*, p. 13. 邦訳、第一分冊、一三ページ)。
- (10) Cf. *ibid.*, pp. 167~168. 邦訳、第二分冊、六三ページ。
- (11) アルチュセール『レーニンと哲学』邦訳、三三―三四ページ。なお、この点については、*For Marx*, pp. 13~14 (邦訳、第二分冊、一三―一四ページ)を併せて参照されたい。
- (12) Cf. L. Althusser, *For Marx*, London 1969, p. 223. 邦訳、第二分冊、一四八―一四九ページ。
- (13) アルチュセールがマルクス主義のヒューマン主義的解釈に反対する実践上の根拠はこの点にある。なぜなら、かかる解釈は理論の面で、マルクス主義を科学の世界からイデオロギーの世界に再び追いやるばかりでなく、実践の面では、ヒューマン主義(『イデオロギー』)にもとづく運動に科学的な方向づけを与えることを不可能にするからである。より詳しくは論文「マルクス主義とヒューマン主義」を参照。
- (14) *ibid.*, p. 235. 邦訳、第二分冊、一六七ページ。
- (15) *ibid.*, p. 232. 邦訳、第二分冊、一六二ページ。
- (16) *ibid.*, pp. 32~33. 邦訳、第一分冊、三八―三九ページ。
- (17) なぜなら、『ドイツ・イデオロギー』以前の著作における哲学に関する発言は、いまだ「哲学的意識」(『イデオロギー』)に汚

染されており、したがって、そこから真正のマルクス主義哲学構築への示唆を読みとることはできないのだから。

(補註) 「理論」—カッコ付の—の規定については、本稿第三節(六八ページ)での規定を参照。

二

さて、それでは、イデオログ・マルクスの科学者マルクスへの変貌はいかにして生じたのか？ 本節の課題は、前節末尾で提起された以上の問題に関するアルチュセールの解釈の骨子を示すことにあるのだが、問題の所在を明らかにするために、まず社会主義圏における正統主義的初期マルクス解釈——アルチュセールはこれを一面で方法上の「折衷主義」⁽¹⁾として規定する——にたいするかれの批判の紹介からはじめることにしよう。

この立場の特色として、かれは(一)分析的、(二)目的論的という二つの前提の存在を指摘し、(三)この二つの前提はさらに第三の前提として、「イデーの歴史を歴史に固有の要素とみなす」ところの、自立的な理念史信仰の立場に支えられているという。ここで「分析的」というのは、「あらゆる理論体系、あらゆる構築された思想は、その要素に還元できる」という考えであって、こういう考えにもとづいて、この立場では、初期マルクスの思想の総体から唯物論的要素と観念論的要素という二つの要素がひとまず分離、抽出され、ついでマルクスの思想形成過程はこの二つの要素の葛藤と前者による後者の克服の歴史として描き出される。アルチュセールによれば、初期マルクスの思想のこういった「要素への分解」とこの分解された「要素そのものの構成」とを可能ならしめるものこそ、あの「完成したマルクス主義の法廷」であって、ここでは初期マルクスの思想の二極に分解せられた諸要素はすべてこの法廷の審判にかけられ、選別、評価されることで、かれの思想形成の歩みはこの「完成した

マルクス主義」に向つてひたすら進行する単線的で連続的な過程として再構成される。思想史のこういった目的論的構成が自立した理念史にたいする信仰に支えられていることはもはや説くまでもなからう。⁽²⁾

ところで、このような「分析的—目的論的な理論」の立場は、直ちにつきのような欠陥を露呈する。まず、ここでは「青年期のマルクスのすべてのテキストの中に唯物論的要素を見出すことができるので、……マルクスがいつ唯物論者とみなされるようになったか」という問いに一義的に答えられなくなってしまう。⁽³⁾ 第二に、初期マルクスの思想の全体を唯物論的要素と觀念論的要素に分解し、これらの分解された諸要素を目的論的立場から再構成するこの方法の下では、マルクスの思想形成のそれぞれの段階において「それらの諸要素が構成する意味」という全体的で構造的な問題が視界から消失してしまふことがこれである。⁽⁴⁾ アルチュセールは正統主義的初期マルクス解釈の方法的立場の特質とそれが必然的にもたらす欠陥とを以上のように述べ、その結論として、この方法的立場の下では対象（＝初期マルクスの思想）の考察は「完成したマルクスの自己裁定、自己認識」以外のなものでもなく、考察対象の発展は「完成したマルクスの自己発展」として現象することを明らかにし、そこにマルクス主義の方法ではなくて、ヘーゲルの自己意識の弁証法の形を変えた復活を見出ししている。⁽⁵⁾

では、アルチュセールは以上の分析的—目的論的方法にたいして、どのような立場に立つのか？ かれはつぎの三つの視点を提示している。(一)、分析的前提にたいしては、かれは「それぞれのイデオロギーは固有の問題意識 (problématique) によつて内的に統一され、したがつてその意味を変化させることなしには、一つの要素も抽出できないような現実的全体と考えられる」というイデオロギーの全体的構造的把握の立場を主張する。(二)、目的論的前提にたいしては、この全体化され、構造化された特定のイデオロギーの意味は「現存するイデオロギ

「の場」および「それを支え、それに反映される社会問題と社会構造」に依存するとの命題を対置する。(三)、これによれば、特定のイデオロギーの「原動力」は「このイデオロギーの外側、……つまり具体的な個人としての著者の中にあり、さらに個人と歴史を結ぶ複雑なつながりに応ずる個人の発展の中に反映される実質的な歴史の中に存在する」のだから、(二)の命題とあいまって、自立的な理念史というヘーゲル主義的構想は廃棄される。⁽⁶⁾では、こういった立場からマルクスの思想形成過程を再検討すると、どういふ新しい知見がえられるだろうか？

すでに紹介したように、アルチュセールはイデオロギーの科学への転換にさいして一般にそこに「一定の変化作用」が働くといい、この変化作用を「認識論上の切断」と名づけたのであったが、いまや(一)の命題を承けて、かれはこの「切断」をイデオロギー的「問題意識」の科学的「問題意識」への転換として具体化する。これをマルクスの思想形成に即しているなら、『四四年手稿』と『ドイツ・イデオロギー』との間で、まさにこうした「問題意識」の決定的で質的な転換が生じたのであって、そこに生じた「切断」をかれはつぎのように説明している。

周知のように、一八四二年から四四年にかけてのマルクスは、「疎外」、「類の本質」、「全体的人間」、「主語の述語への顛倒」など、フォイエルバッハに由来する用語を頻繁に使用している。いわゆる正統主義的解釈はこれらのフォイエルバッハの用語に覆い隠されている唯物論的内容を摘出し、この内容がそれにふさわしい形式をうるところに本来のマルクス主義の成立をみようとしたのであったが、アルチュセールにとっては、これらの個々のフォイエルバッハの用語よりも、むしろこれらの用語とそれによる叙述に意味を与えるこの時期のマルクスの「問題意識」が根本的に哲学的であり、その内容がフォイエルバッハ的であることの方が問題なのである。そこではフォイエルバッハの用語が「まとめて、全体として借用」⁽⁷⁾され、いわば「マルクスはフォイエルバッハの思

想をわがものとし、あたかも自分自身の思想を通して考えるように、フォイエルバッハを通して考えて⁽⁸⁾いるの
であつて、問題は個々の用語やフォイエルバッハからの引用の有無にかかわるのではない。

このように、個々の用語、概念を意味づけ、それらに思想としての統一性を与える一定の構造的枠組を、かれはジャック・マルタンに倣つて「問題意識」と名づける。⁽⁹⁾あの「認識論上の切斷」を説明するために、かれが「問題意識」という概念を特に導入し、この概念の働きを重視する理由は、(一)マルクス自身この概念こそ用いていないけれども、「この概念は円熟期（とくに『ドイツ・イデオロギー』）のイデオロギー分析に終始生氣を与えている」ことにもよるが、さらにその上に、(二)「全体性」というヘーゲルの概念によっては思想や理論の「統一性の限定された構造」を与えることができないのに、「問題意識という概念の下にある限定されたイデオロギー的思想の統一性……を考察すること」は(イ)「その思想のあらゆる要素を統一する典型的な体系的構造を明かすみに出すことと可能」にし、(ロ)こうして「この統一性の中に一つの規定された内容、すなわち、問題のイデオロギーの八諸要素√の意味理解を可能にするばかりか、このイデオロギーを、おのおのの思想家が生きる歴史的な時代によつてその思想家に与えられ、あるいは課せられた問題と関連させることを可能にするような内容を発見することをゆるす」からである。⁽¹⁰⁾

さて、問題意識概念に関する以上の考察を踏まえて、アルチュセールは四二年—四四年のマルクスのフォイエ
ルバッハの問題意識の内容を「人間学的問題意識」として規定する。むろん、かれはこの時期の間にマルクスに
生じた「考察の題材」の変化はこれを否定しない。例えば、フォイエルバッハの「宗教的人間学」のマルクスに
よる「政治的人間学」への転換とそれの「経済的人間学」への深化というように。だが、かれの解釈に従えば、

こうした考察の題材の転変にもかかわらず、「考察の様式」、つまり「思考の対象が考察される起点となる根本的問題意識」は終始変わらないこと、すなわち、それが一貫してフォイエルバッハの人間学に由来する「人間学的問題意識」であることが決定的なのである。⁽¹¹⁾この点について、例えばかれはつぎのように述べている。

「歴史とは理性の疎外、非理性のかたちをとっている理性の産物であり、真の人間の疎外、疎外された人間のかたちをとっている真の人間の産物である。労働から疎外された生産物（商品、国家、宗教）のうちに、人間はそうとは知らずに、人間の本質を実現している。人間のこうした喪失が、歴史と人間とを生みだしているけれども、実はその前提として、あらかじめ存在している明確な本質があったのだ。人間を喪失せる客観性と化したこの人間は、歴史のおわりには、財産、宗教、国家のうちに疎外された人間固有の本質を、主体として、もはやとり戻しさえすればよい——全体的人間、真の人間になるために。」⁽¹²⁾

ところで、以上のような初期マルクス評価は、『四四年手稿』の中にマルクス主義成立の原点をみようとする立場⁽¹³⁾とは必然的に対立せざるをえない。すなわち、アルチュセールは一方で『四四年手稿』のもたらした根本的な新しさを「マルクスと経済学との出会い」に求めながらも、他方、この出会いの特色が「哲学と経済学との出会い」にあることを力説し、ついでこの出会いから生まれ、『四四年手稿』の経済学批判の基礎概念をなすに至った「疎外された労働」概念に註釈をくわえて、つぎのようにいつている。

「この観念が、当時マルクスがそれに与えた役割、つまり（経済学批判の—重田）最初の基礎という役割を立派に演じていること、しかしまた、この観念がこの役割を演じることができているのは、それが人間という概念全体——われわれになじみ深い経済学の諸概念の必然性と内容が、やがて人間の本性からひきだされるものになる

——の委任および派遣として、この役割を受入れるかぎりにおいてだけであることを認識しなければなるまい。」換言すれば、「ある一つの意味内容がやがて哲学から根本的に独立することになるにしても、そうした意味内容を哲学が根本的に支配している」という点で、『四四年手稿』のマルクスはいぜんとして哲学的イデオロギーの制約下に置かれていたのであって、アルチュセールはそこから『四四年手稿』のマルクスは『資本論』のマルクスから「もっとも遠ざかっている」という逆説的な結論をひきだしている⁽¹⁴⁾。

アルチュセールによれば、『四四年手稿』のマルクスと『資本論』のマルクスとの間を隔てるこの深淵をうみだしたもののこそ、『ドイツ・イデオロギー』で生じたあの「認識論上の切断」であって、「人間学の問題意識」の科学的問題意識への転換がすなわちこれである。ところで、イデオロギーの特色は「それ自身の問題意識が自己を意識していない」こと、つまり、自己の思想の展開を支え、それを構造化している問題意識がイデオロギー自体には自覚されえない点にあるのだから、イデオロギーの問題意識の克服のためには、(一)「現に作用しているが自覚されていない問題意識」を意識化し、(二)こうしたイデオロギーの屈折を通して表現されている現実の諸問題を直接の研究対象として真正面からとりあげるのではなくてはならない。マルクスの場合、『ドイツ・イデオロギー』は以上の二課題を解決することによって、一方でマルクス自身もなおそれにとらわれていた「哲学的意識」（『イデオロギー』にとどめをさすとともに、それによって歴史の科学的認識を可能にする科学的な問題意識構成の場をはじめて設定することができた。すなわち、『ドイツ・イデオロギー』はドイツ的理論はすべてヘーゲルの觀念論的な「哲学的意識」に収斂すること、しかもこうした疎外された形態での「イデオロギー」と理論の「超発展」が実は「ドイツの歴史的な低発展」の現われにはかならないという逆説的な関係を暴き出すとともに、そ

れを通じて事物それ自体に達するための道を切り開くことができた。アルチュセールの言葉を借れば、「イデオロギーの内存在の幻想」にかわる「実際の経験と現実的出発の論理」の採用がこれであって、この論理にもとづいたドイツの現状の自覚と「根本的に新しい現実の発見」とが、すなわち「組織された労働者階級」、「発達した資本主義」、「固有の法則にしたがい、哲学も哲学者も必要としない階級闘争」⁽¹⁵⁾とが結びついたとき、科学としてのマルクス主義はそこにはじめて成立基盤を獲得した。

アルチュセールは『ドイツ・イデオロギー』にみられるイデオロギーから現実へ向うこの方法の質的新しき、それと旧来の「人間学的問題意識」との非連続性を明確にするために、『ドイツ・イデオロギー』の方法上の革新のもたらしたものを「現実の歴史への回帰」、「後方への回帰」⁽¹⁶⁾と名づけ、この回帰を通じて「主体」、「人間の本質」、「疎外」などの諸観念は「蒸発」し、「歴史はある△主体∨の外化の過程の歴史であり、△疎外された労働∨における疎外された人間に特有の本質である」という『四四年手稿』のテーゼにかわって、「主体のない過程」という概念がここにはじめて「解放」された⁽¹⁷⁾という。この「主体のない過程」としての歴史を把握するための新しい概念と概念装置が科学としての史的唯物論であって、かれはその骨格をなす問題点をつぎのように要約している。

「(一)根本的に新しい諸概念を基礎にした歴史—政治理論を形づくること。——すなわち、社会構成、生産諸力、生産諸関係、上部構造、イデオロギー、経済による最終次元での決定、他のさまざまな水準の種別的な決定などの概念を基礎にして。

(二)あらゆる哲学的ヒューマニズムのいまだく理論上の志向を根本的に批判すること。

(18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)

(18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)

(18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)

ところで、以上の新しい科学的問題意識とそれに照応する概念、概念装置によって構成される史的唯物論は、一つの科学の体系として、旧来の哲学的イデオロギーの克服の上に樹立されるのだから、かかる科学体系の成立は当然に哲学自体を問題化せずにはおかない。こうして、問題はあらためてつぎのように提起される。マルクス主義哲学は理論的に存在の権利があるのか？ もし然りとすれば、その特質はこれをいかに規定すべきか？ いまやアルチュセールはこの問いに答えなければならない。

(1) L. Althusser, *For Marx*, London 1969, p. 57. 邦訳「第一分冊」七五ページ。

なお、アルチュセールの批判的検討の対象とされているのは「*Sur le jeune Marx, Recherches internationales à la lumière du marxisme*, n. 19, 1960」所収の論文であって、ここでは「*バンクラーゼ、トリファッチ、ラービン、ブルシンスキー、ンシトノフ、オウイボフ、ヤーン、シャフ、グロップ、ヘップナーの著書の一部もしくは論文が仏訳のうえ、収録され*」
「*フ*」
「*フ*」

(2) Cf. *ibid.*, pp. 56~57. 邦訳「第一分冊」七五ページ。

(3) Cf. *ibid.*, p. 59. 邦訳「第一分冊」七八~七九ページ。

例えば「マルクスの唯物論への移行の時期を、ヤーン、パジトノフは一八四四年に、ラービンは一八四三年に、シャフは一八四一年におくというように」。

(4) Cf. *ibid.*, p. 59. 邦訳「第一分冊」七九ページ。

(5) Cf. *ibid.*, p. 60. 邦訳「第一分冊」八〇~八一ページ。

(6) Cf. *ibid.*, pp. 62~63. 邦訳「第一分冊」八三~八四ページ。

(7) *ibid.*, p. 46. 邦訳「第一分冊」六二ページ。

(8) *ibid.*, p. 66. 邦訳「第一分冊」八六ページ。

(9) *ibid.*, p. 32. 邦訳「第一分冊」三九ページ。

- (10) *ibid.*, pp. 66~67. 邦訳、第一分冊、八九一九〇ページ。
- (11) Cf. *ibid.*, p. 68. 邦訳、第一分冊、九一ページ。
 ちなみに、「初期マルクスとヘーゲルとの関係についてのアルチュセールの解釈はきわめて特異である。かれは初期マルクスの時期を、(一)『ライン新聞』の時期——「カント・フイヒテ型の問題意識」を前提とする「自由主義的合理主義の時期」、(二)一八四二年から四五年に至る時期——「フォイエルバッハの人間学の問題意識」にもとづく「共同体的合理主義」の時期に分し、「青年マルクスのヘーゲル主義」というテーゼを一箇の「神話」としてしりぞけるとともに、『四四年の草稿』における突然の全面的な最後の「ヘーゲル回帰」を説いている (For Marx, pp. 35~36. 邦訳、第一分冊、四三—四四ページ)。
- (12) *ibid.*, p. 226. 邦訳、第二分冊、一五二ページ。
- (13) 例えばメイサーロシキは近著『マルクスの疎外論』(I. Mészáros, *Marx's Theory of Alienation*, London 1970.) で、マルクスの全思想体系は *status nascendi* (形成の初期状態) においては『経済学・哲学手稿』(一八四四年) で定礎されたと主張している。なお本書の全体については、重田「書評　メイサーロシキ『マルクスの疎外論』」(関西大学『経済論集』第二〇巻第三号)を参照。
- (14) L. Althusser, *For Marx*, London 1969, pp. 156~159. 邦訳、第二分冊、四七一—五二ページ。
- (15) Cf. *ibid.*, p. 81. 邦訳、第二分冊、一〇六ページ。
- (16) Cf. *ibid.*, p. 76. 邦訳、第一分冊、一〇三ページ。
- (17) アルチュセール『レーニンと哲学』邦訳、一一九—一二〇ページ。なお「歴史が主体なき一過程」だという主張については、同書一二二—一二三ページの叙述が併せて参照されるべきである。
- (18) L. Althusser, *For Marx*, London 1969, p. 227. 邦訳、第二分冊、一五四ページ。

三

周知のように、「哲学的意識の清算」の書である『ドイツ・イデオロギー』は、「自立的な哲学の終焉」とそれにかわる「現実的で実的な科学」、「人間たちの実践的な活動と実践的な発展過程の解明」のはじまりを宣言

していた。⁽¹⁾すでにみたように、マルクス主義をさしあたり歴史の科学の体系として把え、その成立を『ドイツ・イデオロギー』にみるアルチュセールにとっては、『ドイツ・イデオロギー』の以上の宣言は抜き差しならぬ問題として迫ってくるといわなければならない。事実、かれはこの宣言を真正面から受け止めており、その中でかれはこれまでにこの問題に真剣に取り組んできたマルクス主義哲学者がたどった道に二つの方向があったという。その一つは「哲学の実現」による「哲学の止揚」の立場から問題解決の鍵を政治的实践に求めた人々のとった方向であって、かれらは「哲学のプロレタリア的達成における哲学の死をほめたたえた。」他の一群の人々は『ドイツ・イデオロギー』の宣言の後半部分を文字通り実証主義的に解釈して、「哲学の実現、つまり哲学の死を引き受けるのは……純然たる科学である」とした。このような哲学の「実用主義的—宗教的な死」と「実証主義的な死」という二つの立場に反対して、かれは「哲学の哲学的な死」の立場を唱える。それは「われわれ自身のために『若きマルクス』の批判的オデュセイアをふたたびはじめることにはかならないが、かれの場合、マルクスの思想形成史の再検討という哲学的実践はまさにこの遍歴の旅だったのであって、そのはてに訪れたのがイデオロギーとしての哲学の死であった。⁽²⁾けれども、すでにみた立場に立つかれにとっては、史的唯物論という科学の成立は哲学の政治的实践への解消や実証主義科学への解消であってはならず、それは同時にこの歴史の科学と結びついた、とはいうものもはや単なる科学でもイデオロギーでもないところの新しい哲学、唯物弁証法としての哲学の再生でなければならない。⁽³⁾

では、この哲学は哲学としてどういう性格のものなのか？　そもそも、それは独立の体系をそなえた形で今日存在するのだろうか？　後者の問いにたいするアルチュセールの答えは否であって、その理由を説明するために、

かれは「科学的切斷の衝激はその瞬間には感じられず、哲学がそれによって組みかえられるためには時間が必要だ」ということを根拠に、「科学にたいする哲学のおくれ」というテーゼを提唱し、マルクス主義の古典家たちの場合、独立の体系的な哲学の書物を書くにはなお「時が熟していなかった」のだと述べている。⁽⁴⁾とはいうものの、マルクス主義哲学は全く存在しないわけではない。それはマルクス主義の古典家たちのもとで「実践の状態」で現に存在しているのであって、もし然りとすれば、この「実践の状態」で存在している哲学を意識的にとりだし、体系化する作業こそ、今日、マルクス主義哲学者に課せられた課題だということにならう。いまやこの課題解決の地道な作業にとりかかるべきだ——アルチュセールはこう主張している。⁽⁵⁾

ところで、この作業をすすめるためには、マルクス主義哲学が「実践の状態」で存在するということの内容がまず明らかにされねばならない。アルチュセールによれば、一般に実践とは「所定の素材を所定の生産物に変化させる一切の過程」、あるいは「所定の（生産の）手段を用いる、所定の人間によっておこなわれる変化の一切の過程」を指していわれるのだが、この実践の総体は、「実践の種別的形式」の差違に依りて、生産的実践、政治的実践、イデオロギー的実践、理論的実践などに区分される。⁽⁶⁾かれがマルクス主義哲学は「実践の状態」で存在するという場合の実践とは、これらの諸実践のうちで、マルクス主義の理論的実践とその成果であるマルクス主義理論（科学）に依拠した政治的実践とをさしていったのであって、マルクス主義哲学が「実践の状態」で存在するとは、マルクス主義の古典家たちのもとでは、以上の二つの実践の中でマルクス主義の哲学が活動の状態にあるということである。いまこの点を理論的実践に関する分析に限定して、かれの所説のあらましをうかがうなら、それはつぎの通りである。

すでに述べたように、理論的活動も実践の一つの「種別的形式」にはかならないのだから、実践に関する一般の規定は理論的実践にも形を変えて妥当するはずであって、アルチュセールはこういった観点から理論的実践を規定して、理論的実践は①他の実践——「経験的」、「技術的」、「イデオロギー的」などの——によって与えられる「素材」(表象、概念、事実)、②「△理論▽」に関する諸概念と方法というそれらの諸概念の使用法」とからなる「生産手段」、③「理論労働そのもの」の三つの契機からなり、この実践の成果は「認識」の生産(科学的真理の獲得)である、という。と同時に、かれはこの理論的実践の中で理論という概念で指示されるものに、相互に区別されるべき三つの異なった層が存在することを指摘している。その一つは「科学的という性格をもつ一切の理論的実践」を指すところの理論であり、これにたいして、かれは万有引力の理論、波動力学、史的唯物論などのように「現実存在している科学の一定の理論体系」を「理論」(《theorie》)というカッコ付の記号で区別する。ところで、これらの「理論」体系は「その△理論▽」の面で、この体系の複合的な統一の内部に、……自己自身の理論的実践の成果であり、しかも以後この実践の条件、手段となるような諸成果を反映している」はずであって、この諸成果を一般化し、理論化したものを、かれは特に『理論』(Théorie)——本稿では二重カッコ付で示すと名づけている。「既存の経験的実践(人間の具体的活動)のイデオロギー的産物を『認識』(科学的真理)に変えていく(諸科学の) 既存の理論的実践に関する『理論』」、あるいはそれを基礎に彫琢のくわえられた「実践一般の『理論』」(『理論』一般)がこれである。⁽⁸⁾

それはともかく、この『理論』一般と理論的実践とは一般につきのような関係におかれている。すなわち、理論的実践はその過程で「自己自身の実践、つまり理論的実践過程に関する『理論』をつくりだそうという欲求」

を必ずしも感じない。換言すれば、理論としての科学は、「自己のおこなっていることに関する『理論』」、「自己の『方法』」に関する『理論』がなくても、自己の目的である認識を産み出すことができる。⁽⁹⁾だが他面、人は「生産手段」としての「方法」を媒介に「素材」（表象、概念、事実）に働きかけ、それによってはじめて「所与のもの」を認識に変えることができるのだから、『理論』が理論的実践の過程で「生産手段」、「方法」として生きた姿で働いていることも疑いない。アルチュセールがマルクス主義哲学は出来合いの形では存在しないが、「実践の状態」で存在しているというとき、それは以上の事態をさしていったのである。この点をマルクスの理論的実践の典型例である『資本論』についてとりあげ、かれはつぎのようにいっている。

「レーニン⁽¹⁰⁾はマルクスの『資本論』の中にこそ、マルクスの弁証法——この言葉によってレーニンはマルクス主義哲学そのものを指していた——を探究しなければならぬと言っていた。『資本論』には新しい哲学の諸カテゴリーを完成し、あるいは鍛え上げることのできるものが存在しているに違いない。諸カテゴリーは、そこで確かに仕事中であり、『実践の状態』にある。」⁽¹⁰⁾

このように理論的実践は無関心のまま放置しているけれども、現実にはこの実践を支え、実践を所期の成果（認識）の産出に向けて働き動かしている語カテゴリー——この実践過程で「仕事中」の諸カテゴリーを「理論」から剝離して意識化し、理論として体系化したものこそ、アルチュセールのいわゆる「理論一般」であり、マルクス主義哲学のさしあたりの形態にはかならない。

では、このようにして構成されるマルクス主義哲学はいかなる性格のものであろうか？ 例えば『資本論』を読む」というように、アルチュセールは好んで「……を読む」という。かれにとっては、「読む」(lire)と

は「徴候的に読むこと」(Lecture symptomale)⁽¹⁾、すなわち「理論」(もしくは「イデオロギー」)の「理論」(「イデオロギー」)としての展開をたどることを通じて、「理論」(「イデオロギー」)の無意識の部分、つまり「理論」(「イデオロギー」)の隠された構造(「問題意識」、「方法」など)を読みとることであって、例えば『資本論』の中からその「理論」の展開を通して「仕事」の「理論」を積極的に読みとり、これを『理論』一般の構成に役立てることがこれである。ところで、この『理論』は理論的実践の過程では、「理論」による認識獲得のための「生産手段」(方法)として働いているのだから、この実践の成果である「理論」上の著作を「徴候的に読む」ことを通じて読みとられる『理論』はひとまず、すぐれて方法の体系という性格をもたざるをえない。すでにみたように、アルチュセールは史的唯物論という科学の成立と同時に、それに即応して登場するマルクス主義哲学の性格を規定して、科学と結びつきながら、しかも科学に解消しえないものとしたのであったが、その内容が方法の体系としての哲学にほかならぬことはいまや明らかである。

さて、アルチュセールの構想するマルクス主義哲学が、一面で実践一般の『理論』としてすぐれて方法の体系であったとすれば、同時に他面で、それはクリティシズムとしての哲学でなければならぬ。すでに述べたように、イデオロギーと科学とは相互に問題意識、概念、概念装置を異にするものとして、両者の間にはあの「認識論上の切断」が介在し、後者は前者との関係の断絶の上にはじめてその体系を整えることができたのであった。とはいうものの、科学の発展をおしすすめる理論的実践は真空の中でおこなわれるわけではない。それは様々のイデオロギー状況の中で、ときにはそれと対峙し、あるいは両者の相互侵透を通じておこなわれるのが実状である。してみれば、「攻めかこむイデオロギー」から、ある恩恵によって保護され「純粹の」科学の発展などあ

りえず、科学は「それを占有し、それにつきまとい、それを窺うイデオロギーから絶えずみずからを解放」し、「純化」するといふ条件の下でしか存在し、発展することはできない⁽¹²⁾。アルチュセールによれば、科学の存在と発展のためにかかる条件を確保すべく不断に闘い続けることこそすぐれて哲学に課せられた使命の一つであって、しかもかれの場合、マルクス主義哲学は科学と結びつき、さしあたり科学の方法として体系化されるはずのものであったのだから、マルクス主義哲学こそこの闘いの中でもっとも有効な働きをする哲学だということになる。こうして、アルチュセールはマルクス主義哲学がこの闘いの中で果す役割を「理論の領域における実践的な形での介入」と名づけ、この形での介入の核心を、理論の領域内で「科学的なものとイデオロギー的なものとの間に境界線を引くこと⁽¹³⁾」に求めている。例えば、かれはマルクスにおける「理論上の反ヒューマニズム」を説き、初期マルクスにおける「人間の自己疎外と止揚論」に依拠したマルクス主義のヒューマニズム的解釈に強く反対するのだが、史的唯物論を科学の体系として把握し、ヒューマニズムをイデオロギーの一形態として規定するかれにとっては、マルクス主義のヒューマニズム的解釈はイデオロギ的要素と科学的要素とのとりちがえ乃至混同にもとづくのであって、マルクス主義のこういった解釈に反対し、マルクスの「理論上の反ヒューマニズム」を明確にすることは、あの二つの要素の間の「境界線」をあらためて引き直し、それを通じて哲学の立場からマルクス主義の科学としての一層の純化と発展に寄与することにはかならない⁽¹⁴⁾。

それはともかく、アルチュセールは、哲学のこういった「理論の領域における実践的な形での介入」と並んでいま一つの介入の形、すなわち、「定義づけられた諸カテゴリーの定式化による理論的な形での介入⁽¹⁵⁾」の存在することを説き、哲学の「理論の領域における介入」を以上の二つの形での介入の統一において把握している。わた

くしはさきにアルチュセールの構想するマルクス主義哲学の根本的性格を、方法の体系としての哲学とクリティシズムとしての哲学という二側面の統一にみたのであったが、それがアルチュセールの上述の規定とほぼ重なりあうことはもはやあらためて説く必要はなからう。

- (1) Cf. K. Marx / F. Engels, I. Feuerbach. Gegensatz von materialistischer und idealistischer Anschauung, *Über Ludwig Feuerbach*, Reclam, Leipzig 1970, S. 16. 花崎崇平訳、四三—四四ページ。
- (2) Cf. L. Althusser, *For Marx*, London 1969, pp. 28—30. 邦訳、第一分冊、三三—三五ページ。
- (3) 例えば、アルチュセールはじきのように記述している。「マルクスは歴史理論（史的唯物論）を築くことによって、ただ一つの同じ動き（認識論上の切斷—重田）の中で、それ以前にかねがもっていた観念論的・哲学的意識と断絶し、同時に新しい哲学（弁証法的唯物論）を築いたのであった。」（*For Marx*, p. 33. 邦訳、第一分冊、四〇—四一ページ）
- (4) もちろん、アルチュセールはエンゲルス、レーニンの哲学上の著作を忘れてはいるわけではない。ただ、マルクス主義哲学としてみた場合、それらは大きな制約をうけているのであって、例えば「反デューリング」については、エンゲルスは結局「職業的な哲学者たちを論破しえなかった」（「レーニンと哲学」、四二—四三ページ）と、レーニンの『唯物論と経験批判論』に関しては、その思考が依然として「客観的経験論の問題設定の内側」（同上、五〇—五一ページ）でおこなわれていることを指摘している。ただ、レーニンの『哲学ノート』と毛沢東の『矛盾論』と『実践論』にたゞする評価はこれとは別である（*For Marx*, p. 182. 邦訳、第二分冊、八三—八四ページ）。
- (5) アルチュセール『レーニンと哲学』 邦訳、三八—四四ページ。
- (6) Cf. L. Althusser, *For Marx*, London 1969, pp. 166—167. 邦訳、第二分冊、六一—六二ページ。
- (7) *ibid.*, p. 168. 邦訳、第二分冊、六四—六五ページ。
- (8) Cf. *ibid.*, pp. 167—168. 邦訳、第二分冊、六二—六四ページ。
- (9) Cf. *ibid.*, pp. 173—174. 邦訳、第二分冊、七一—七二ページ。
- (10) アルチュセール『レーニンと哲学』 邦訳、四一—四二ページ。
- (11) Cf. L. Althusser, *For Marx*, London 1969, p. 254. （英訳者の用語解説）

(12) Cf. *ibid.*, pp. 170~172. 邦訳、第二分冊、六七―六八ページ。

(13) アルチュセール『レーニンと哲学』邦訳、七二ページ。なお *For Marx*, pp. 172~173 (邦訳、第二分冊、六八―七〇ページ) を併せて参照のこと。

(14) マルクス主義のヒューマニズム的解釈にたいする批判の理論上の根拠については、本稿第二節の議論を、実践的根拠については、本稿第一節の註(13)を参照。

(15) アルチュセール『レーニンと哲学』邦訳、七二ページ。

む す び

以上、わたくしは本稿をひとまず三節にわけ、まず第一節では、アルチュセールにおけるイデオロギーと科学との峻別、およびイデオロギーとの関係において史的唯物論の占める特権的地位に関するかれの解釈について紹介した。ついで第二節では、いわば第一節での結論のケース・スタディを兼ねて、この結論をマルクスの思想形成の歩みに適用した場合に生ずる新解釈をかれの所説にそって検討してみた。この検討を通じて明らかにされたことの一つは、哲学の問題化というマルクス主義哲学の存否にかかわる問題であったが、そこで第三節ではこの問題を承けて、マルクス主義哲学の存立の根拠と存在形態とをアルチュセールのいわゆる「理論的実践」の構造分析の整理を通じて明らかにしようとした。その結果えたさしあたりの解答は、方法としての哲学とクリティシズムとしての哲学という二つの側面の統一としてのマルクス主義哲学という性格規定であった。

では、アルチュセールにとっては、この二つの性格を兼ね備えたマルクス主義哲学はどのような形で具体化されるべきなのか？ 例えば本稿の「まえがき」で、わたくしはかれのいわゆる「重層的決定の理論」について一言

し、それがヘーゲル弁証法とマルクス主義との関係の再検討と結びついて提言されたものであることを示唆しておいたが、このヘーゲル弁証法の再検討がヘーゲル弁証法と『資本論』の方法（＝唯物弁証法）との「種別的差異」を求めることであつたことを考えあわせるなら、この「重層的決定の理論」をめぐる作業が方法としてのマルクス主義哲学にヨリ厳密な論理形式を附与しようとする試みの一つにはかなならぬことはおのずから明らかである。他方、すでにみたように、かれのマルクス主義論の特色の一つとして、マルクス主義のヒューマニズム的解釈にたいする強烈な批判意識を指摘することができるが、それは一面でかれにおけるイデオロギーと科学との峻別に理論的実践的根拠をもつとともに、こうしたマルクス主義解釈にたいする批判自体が、イデオロギーと科学との弁別を要求するものとして、他面ではクリティシズムとしての哲学というマルクス主義哲学の根本的存在形式から発する哲学的実践の現われの一つにはかなならなかつたのである。このように、マルクス主義発展のためのかれの積極的提言の一つ一つは、本稿で検討したかれにおける旧来のマルクス主義解釈にたいする反省とそれにもとづくマルクス主義思想の構造把握に深く根ざしているのであつて、その意味では、本稿はあくまでもかれの積極的提言の理解と批判的吟味のための予備作業にすぎない。